

## 028 サマリアの女性との対話Ⅱ

ヨハネによる福音書 4 : 27~42

27 ちょうどそのとき、弟子たちが（買い物から）帰って来て、イエスが（公の場で評判の良くないサマリア人の）女の人と話をしておられるのに驚いた。

しかし、（弟子たちは気になったが沈黙し）「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。

28 女は、（イエスに自分の過去や自分が負ってきた重荷などをズバリ言い当てられ、弟子たちも帰って来たので）水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。

29 「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」

30 人々は（自分の目と耳で確かめるために）町を出て、イエスのもとへやって来た。

31 その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、

32 イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物（→霊的な糧⇔肉の糧）がある」と言われた。

33 弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。

34 イエスは言われた。

「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。

→リビング・バイブル：そこでイエスは説明なさいました。「いいですか、わたしの言う食べ物とは、わたしを遣わされた神のお心にかなうことをし、神の仕事をやり遂げることなのです。

35 あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言うておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、36 刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。

→リビング・バイブル：35 あなたがたは、『刈り入れはまだ四か月も先のこと、夏も終わりにならなければ始まらない』と思っっているようですね。だが、回りをよく見なさい。人のたましいの畑は広々と一面に実り、刈り入れを待つばかりです。36 やがて、刈り入れをする人たちはたくさんの報酬をもらい、永遠のいのちに入るたましいを天の倉に納めます。その時、種をまいた者も、刈り入れをした者も共に、大いに喜ぶのです。

37 そこで、『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』ということわざのとおりになる。

→ミカ書 6 : 15

お前は種を蒔いても、刈り入れることなく／オリーブの実を踏んでも／その油を身に塗ることはない。新しいぶどうを搾っても／その酒を飲むことはない。

38 あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」

→リビング・バイブル：あなたがたが自分で種まきをしなかった畑に、わたしはあなたがたを遣わしました。ほかの人々が苦労して育てたものを、あなたがたが刈り入れるのです。

39 さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した【女の言葉】によって、イエスを信じた。

40 そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。

41 そして、更に多くの人々が、【イエスの言葉】（→ロゴス）を聞いて信じた（→信仰に導かれた）。

42 彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

→女性が井戸で出会ったことを話したので、サマリア人たちはイエスがこの世の救い主であると信じた。サマリア人は、自分たちのゲリジム山（申命記 11：29）に神殿を建て、律法を独自に解釈していたので、ユダヤ人は、サマリア人をイスラエルの神に忠実でないと考えていた。

→あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる（使徒言行録/ 01 章 08 節）。

→主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった（申命記 8：3）。

### 【参考】 サマリア人

サマリア（Samaria）は、パレスチナ中央部の地域名で、北にガリラヤ、南にユダヤが接する。「列王記」によると、サマリアという名前は昔この辺の土地を持っていた地主「シェメル/セメル Shemer」の名前が起源とされる。

→列王記上 16：23～24 ユダ（南王国）の王アサの治世（BC911～870/913～873）第三十一年に、オムリが（北）イスラエルの王（BC885～874/876～869）となり、十二年間王位にあった。彼は六年間ティルツアで国を治めた後、シェメルからサマリアの山を銀二キカル（約 34 kg/キカル×2=約 68 kg、Ag80 円/g×68 kg≒544 万円）で買い取り、その山に町を築いた。彼はその築いた町の名を、山の所有者であったシェメルの名にちなんでサマリアと名付けた。

→オムリ：列王記に記されている以上に実際には王として成功を収めた（列王記 16：21～27）。モアブを支配し、息子の婚姻を通してシドンと同名を結び（16：31）、サマリヤを築いて首都とした。しかし、この卓越した政治力も信仰の面では発揮されなかった（16：25～26、ミカ書 6：16）。



その後この辺り周辺が北イスラエル王国の首都となったため、都市に限らずにこのあたりの地域やもっと広く北イスラエル王国そのものを指すようになった。

BC722 年、北イスラエル王国は、アッシリアに滅ぼされ属領（住民を奴隷として連れ去りーアッシリア捕囚、代りにメソポタミア北部ーチグリス川とユーフラテス川の上流域ーのアッシリア人、アラム人を移住させた）となる。この移住してきた異民族と混血したのがサマリア人で、以後長く異教徒としてユダヤ人に排斥された。

サマリア人はゲリジム山（申命記 11：29）に神殿を持っていて、祭司もおり、また、独自の解釈をしていた（ルカによる福音書 10：25～37）ので、ユダヤ人はサマリア人をイスラエルの神に忠実でないと考えていた。